

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：82705

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381338

研究課題名(和文) 吃音のある子どもの自己肯定感形成に向けた教員と保護者の協働支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Developing a Collaborative Support Program for Teachers and Parents/Guardians of Children with Stuttering to Build Self-esteem

研究代表者

牧野 泰美 (Makino, Yasumi)

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・インクルーシブ教育システム推進センター・総括研究員

研究者番号：80249945

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：吃音のある子どもが自己の吃音とうまく折り合い、自己肯定感を培っていくためには、保護者への支援も重要である。本研究では、教員と保護者との協働を支援するための知見を得ることを目的に、文献研究、聞き取り調査、事例研究を行い、総合的に検討・考察した。その結果、教員の保護者への情報提供の視点(吃音についての基礎知識、吃音者とその暮らしについての情報、子どもへの対応に関する事項)、保護者と教員が共に取り組める内容についての知見が整理された。

研究成果の概要(英文)：The support to parents/guardians is important for children with stuttering to compromise with own stuttering well and grow own self-esteem. In this study, the review study, the interview survey, and the case study were performed for the purpose of getting the knowledge to support collaboration with teachers and parents/guardians, and those were considered overall. As a result, Points of the dissemination of information about stuttering to parents/guardians ("basic knowledge about stuttering", "information about the life of stutterm", and "points about support to children"), contents on which teachers and parents/guardians can work together, were considered.

研究分野：言語障害教育

キーワード：吃音 吃音受容 吃音理解 自己理解 自己肯定感 情報提供 協働 啓発

1. 研究開始当初の背景

(1) 障害のある子どもへの教育・支援に関する研究の現状

障害のある子どもの教育・支援をめぐる諸研究には、個々の病理学的、生理学的、心理学的特徴を明らかにすること、さらにはそれに基づき、個々の障害の改善、能力の向上を目指した指導方法の開発等を目指したものが多くある。勿論、こうした研究がなされる意義は大きい。実際には個々の子どもはそのような病理学的、生理学的、心理学的特徴を有しながら、家庭・学校・地域等、周囲との関係の中で暮らしており、その中で様々な問題を抱え込んでいる。従って障害のある子どもへの教育・支援に関しては、個々の障害・特徴の解明とともに、そのような障害・特徴を有する個が、周囲の中でどのように生きているか、暮らしているかにも目を向け、問題解決の糸口を見つけることが必要であるが、現状ではこの観点からのアプローチは極めて少ない。

(2) 言語障害のある子どもの暮らしの充実に向けたアプローチと自己性・自己肯定感を育む支援

研究代表者らは、障害があっても暮らしにくさを払拭し、充実した暮らしを実現することに向けての教育・支援が重要であるとの観点から、主に言語障害のある子どもを対象に、通級指導教室における、暮らしにくさの払拭、暮らしやすさの実現、暮らしの充実等を目指した支援の観点や教育実践の試みを検討し、今後のアプローチ及び議論の柱を探った(牧野, 2005)。その中で、一つの柱として注目されたのは、子どもの自己性、自己肯定感を育む支援である。

(3) 吃音のある子どもの自己肯定感を支えるアプローチの必要性と現状

言語障害は症状が治癒する可能性も、生涯、症状を持ち続ける可能性もある障害である。とりわけ吃音については治癒する場合もあるものの、現時点で原因は未解明であり、確実に症状を改善させる方法は見いだされていない。従って吃音のある子どもや保護者にとっては、症状の改善、受容等、障害に立ち向かう態度が決まりにくく、精神的にも揺れやすい。また、吃音は話すことそのものの不便さばかりでなく、話すことへの不安、人や社会への恐怖、自己否定等、吃音があることによって生じる問題を抱えることも、それが人生を左右する問題につながることも少なくない。

このような現状においては吃音の科学的な原因究明や、治療法の開発に向けての研究が進められる一方で、子どもが吃音と上手く折り合い、つき合い、自己を保っていくための支援の在り方を研究することも重要と考えられる。こうした観点から、研究代表者らは、吃音のある子どもの自己肯定感を支える

ための教育実践の視点を検討し(国立特殊教育総合研究所, 2007)、吃音のある子ども同士の小集団活動や、個別指導の実践を通して、吃音のある子どもの自己肯定感を支える視点の一つとして、子どもが自らの吃音や自己について学んでいくことの必要性を示した。さらに、それを受けて「子ども自身が吃音や自己について知る、学ぶ」ための指導内容・方法の検討・開発に取り組んだ(牧野, 2011)。この「吃音を学ぶ」ための方法や教材開発は、近年、小林(2009)、伊藤ら(2010)によっても着手されており、子どもが自らの吃音を学び、吃音と上手く向き合っていくための指導・支援の内容が構築されてきている。

(4) 子どもと多くの時間を過ごす保護者を視野に入れたアプローチの必要性

子どもが吃音と上手く向き合い、自己肯定感を育てていくためには、日常の多くの時間を共に生活している保護者の役割が大きいことが指摘されている(中村, 2011)。すなわち、通級指導教室等の教育の場や、吃音当事者団体の学習会等の場で、これまでの実践・研究によって構築されてきた、子どもが吃音と上手く向き合うための実践(小林, 2009; 伊藤ら, 2010; 牧野, 2011, 等)に取り組んでも、吃音に対する保護者の考え方、子どもへの関わり方にアプローチしない限り効果は限定的にならざるを得ない。

従って、吃音のある子どもの自己肯定感への支援に向けては、保護者への情報提供の在り方や、教員と保護者との協働に視点を当てた検討が不可欠な現状があった。

2. 研究の目的

本研究では、吃音のある子どもが吃音と上手く向き合い、自己肯定感を育てていくための教員と保護者の協働に焦点を当てる。上記のこれまでの研究成果を取り込みつつ、保護者が吃音のある子どもの自己肯定感を支えていくために、教員はどのような情報提供をしていく必要があるのか、どのように保護者を支援することが有効なのか、教員と保護者が共に取り組める内容・方法はどのようなものなのかを検討する。

以上から、本研究の目的は、吃音のある子どもの自己肯定感を育てていくために、教員の保護者への情報提供の内容、保護者支援の在り方、教員と保護者が共に取り組める内容・方法を明らかにし、教員と保護者の協働を支援するためのプログラムを検討・構築することである。

3. 研究の方法

本研究では、文献・資料による研究、聞き取りによる調査研究、実践研究を関連させ総合的に検討・考察する。具体的には以下の通りである。

(1) これまでの吃音研究の中で、子どもの吃

音理解、自己認識、自己肯定感を扱っているものを収集・概観し、子どもが吃音と向き合うための知見を整理する。

(2)各地の言語障害通級指導教室や研究団体等が、保護者向けに作成・配布している啓発パンフレット等を収集・整理し、吃音に関してどのような情報提供がなされているかを整理する。

(3)吃音のある子どもの保護者に望まれる子どもへの対応・関わり方、教員や専門家が保護者に伝えるべき吃音に関する情報の内容と提示の仕方を中心に、成人吃音者に聞き取り調査を行い整理する。

(4)言語障害通級指導教室担当教員に対して、上記(3)と同様の内容、及び吃音のある子どもの保護者に対して吃音についてどのような説明をしているかについて、聞き取り調査を行い整理する。

(5)吃音者の保護者から、吃音に対する思い、子どもへの対応等について収集する。

(6)各地の吃音のある子どもと保護者、教員等で実施している学習会、研修会、交流会等のプログラム及び内容を収集・整理し、教員と保護者が共に取り組める内容を検討する。

(7)以上を検討し、保護者の子どもへの対応の在り方、言語障害通級指導教室担当教員に求められる保護者への情報提供の在り方、教員と保護者が共に取り組める内容について検討する。

(8)言語障害通級指導教室担当教員と連携し、上記に関する継続的な実践研究と実践事例の収集を行う。

(9)総合的に考察し、上記(7)の実証的な検討を行うとともに、吃音のある子どもの自己肯定感形成に向けた、保護者への支援、教員と保護者の協働についての知見を整理する。

4. 研究成果

(1)吃音についての保護者への情報提供の視点について

文献・資料の整理、聞き取り調査、及び実践研究の検討から、吃音についての保護者への情報提供の視点として、吃音についての基礎知識（吃音に関する一般的知識）、吃音者とその暮らしについての情報（吃音のある人の日常生活、生き方の観点からの情報）、子どもへの対応に関する事項の三点に整理することができた。以下にそれぞれの内容を示す。

吃音についての基礎知識

・「吃音」とはどんなことをいうのか

- ・症状の種類
- ・吃音の波
- ・これまでに考えられた原因
- ・有症率
- ・性差
- ・発吃の時期
- ・これまでに試みられた治療法
- ・分かっている吃音の特徴
- ・吃音についての間違った情報等

吃音者とその暮らしについての情報

- ・学校生活の様子
- ・困った場面の対処法
- ・吃音に関する様々な捉え方
- ・吃音の有名人
- ・吃音者の職業
- ・吃音者の団体・会
- ・吃音者がしている工夫
- ・様々な吃音者の考え方、生き方
- ・様々な吃音者の体験談
- ・様々な吃音者の親の体験談等

子どもへの対応に関する事項

- ・吃音に対する気持ちの整理
- ・傾聴の重要性
- ・共感の重要性
- ・子どもとの対話の重要性
- ・吃音について話すことの重要性
- ・苦しそうなときの対応について
- ・保護者自身の不安の整理等

様々な吃音の啓発リーフレットにおいて取り上げられている情報としては、吃音の症状、原因、有症率、発吃の時期等の基本情報についてはリーフレット間に差は見られなかったが、吃音をどう捉えたらよいか、子どもにどう関わっていったらよいかに関しては、説明の深さ、踏み込み方に差が見られた。また、上記にある、当事者の思いや考え方がどの程度掲載されているかにも違いが見られた。

(2)教員と保護者の協働について

吃音のある子どもや、吃音のある子どもと保護者が一緒に行っている活動内容の収集と、言語障害通級指導教室等における実践的検討を通して、子ども同士、保護者同士、教員と保護者が子どもと共に取り組める内容について整理することができた。以下にそれぞれの内容を示す。

吃音のある子ども同士の活動（グループ活動・グループ学習等）

吃音のある子どもが、自己の吃音と向き合うことを支える上で、以下の取組が効果的と考えられた。

- ・吃音を意識した時期、自分の吃音の特徴、

様々な経験・エピソード、苦手な言葉や苦手な場面、苦手な言葉や場面に遭遇した時どうしているか等についての情報交換

- ・吃音に関する相互の気持ちを出し合う・話し合う取組
- ・自分の気持ちを文章にする取組
- ・自分のことを知ってもらうためのクイズを出し合う取組
- ・他者からの自分についての質問に答える取組
- ・表現活動
- ・創作活動
- ・ゲーム・レクリエーション活動

等

保護者同士の取組

保護者同士の取組として、以下のような活動が考えられる。

- ・成人吃音者の話を聞く
- ・先輩保護者の話を聞く
- ・吃音のある子どもを巡る日常の出来事に対する対処法についての情報交換
- ・子どもの吃音の症状が重くなったときの心構えや吃音に対する考えについてのディスカッション

等

いずれにしても、吃音について、吃音に対する思いについて語り合うことが重要と考えられる。

教員と保護者が子どもと共に取り組める活動

教員と保護者が子どもと共に取り組める活動として以下のようなことが考えられる。これらは、状況によって、教師と子ども、保護者と子どもの二者間でも取組可能である。

- ・自己紹介パンフレットの作成等、自分のことを他人に伝えるための紹介文等を一緒に考える活動
- ・吃音者や吃音のある子どものドキュメンタリーや記事についての感想を話し合う取組
- ・吃音のある子どもが、個々の気持ちの中に抱く、自己や吃音を巡る物語(ストーリー)をネガティブなものからポジティブなものに教員や保護者との対話によって変化させていく取組
- ・吃音のある子どもが、教員や保護者との対話の中で、自己や自己の吃音を再解釈していく取組
- ・精神的な傷・落ち込みから、立ち直るための視点(否定的な思考から肯定的な思考に変換する視点)を探していく取組

等

これらの取組においては、子どもと教師や保護者との対話が重要であり、他にも様々な活動が考えられる。

(3)子ども自身が考えることへの支援

保護者への情報提供の内容や、教員が保護

者と共に取り組める内容の検討を通して、子ども自身が吃音のこと、自分のことを考えることを支援することの重要性が示唆された。

子どもが周囲と自分の違いを感じ始める時期は、吃音のことを話し合い、考える機会と捉えることが可能であり、吃音のことについて、保護者と子どもの間で話題にしていくことが重要と考えられる。

また、指導者、保護者、子どもと一緒に過ごせ、取り組める場(交流会、集いの場、キャンプ等)においては、相互の出会い、交流、親睦とともに、共に考え、語り合うことを重視したプログラムにすることが重要である。

(4)今後の課題

本研究においては、吃音のある子どもの保護者への情報提供の内容や、教員が保護者と共に子どもと取り組める内容について整理することができた。これらの知見は、教員と保護者の協働の支援につながると考えられる。しかし、教員と保護者の協働を支援するプログラムという意味では課題も多く、教員の保護者への情報提供の内容、保護者に求められる子どもへの対応、教員と保護者が共に取り組める内容について、子どもの発達段階や個々の状況も加味したパッケージの作成等が望まれるであろう。

今後、より多くの実践の場で検討を重ね、実践例を蓄積させるとともに、言語障害通級指導教室等において成果が活用されるように普及していくことも課題となる。

また、保護者と子どもの話し合い、語り合いを促す一助として、吃音のある子どもを、保護者が肯定的に見ていくために役立つ情報を、今後さらに整理していくことが重要と考える。

<引用文献>

伊藤伸二・吃音を生きる子どもに同行する教師の会(編著)(2010)吃音ワークブック・解放出版社。

小林宏明(2009)学齢期吃音の指導・支援・学苑社。

国立特殊教育総合研究所(2007)吃音のある子どもの自己肯定感を支えるために・国立特殊教育総合研究所課題別研究報告書(研究代表者:牧野泰美)。

牧野泰美(編著)(2005)通級指導教室における言語障害児への生活充実指向型教育支援プログラムの構築・科学研究費研究成果報告書(課題番号:14651065,研究代表者:牧野泰美)。

牧野泰美(編著)(2011)吃音を知る・学ぶ、自分を知る・学ぶための手がかり-吃音、そして自分自身と向き合うために-・科学研究費研究成果報告書(課題番号:20530900,研究代表者:牧野泰美)。

中村勝則(2011)吃音のある子どもに向き合うために・NPO法人全国ことばを育む会。

5．主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕(計1件)

牧野泰美 吃音のある子どもへの指導・支援を考える - 共感性(関係性)・自己性とレジリエンス - .「第5回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」資料．9-10，2016年8月．

6．研究組織

(1)研究代表者

牧野 泰美 (MAKINO, Yasumi)

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・インクルーシブ教育システム推進センター・総括研究員

研究者番号：80249945